

### 市指定記念物 (史跡)

- ・名 称 袖野ストーンサークル
- ・指定年月日 昭和58年4月1日
- ・所在地 仙北市西木町小淵野字袖野227の3
- ・所有者 仙北市
- ・発見年月日 昭和26年5月10日



発見の端緒と発見者 昭和23年地区の開墾とともに、かねて考古学の見地から此の地域に多大の関心をもっていた道目木の佐藤正作氏が大小様々な石の出土を知り、村教育委員会に報告、調査の端緒となる。

- 調査結果 組石(17ヶ所) 立石と思われる棒石40cmを中心に  
 大小20個位で囲んである。
- 穴(9ヶ所) 最大2.4m×1.0m 最深60cm×80cm程度  
 円形の直径61cm 深さ80cm程度
- 出土品 骨粉らしきもの 発火石 叩切石  
 土器破片 木灰 灰の塊
- 土 器 復元できた土器 高さ40cm 口径29cm  
 胴回り93cm 底径11cm



袖野遺跡組石と土坑(穴)調査風景

考古学で見た袖野遺跡 袖野遺跡は、今から4千5百年前の石器時代における組石群であって、組石は生物死体・焼いた骨を穴に埋め黒土をかけた上に組まれたものと想像される。その規模に於いては、大湯環状列石に比して著しく小であるが出土の形式に於いて古いものである。

(昭和58年12月 西木村教育委員会)

袖野遺跡の発掘調査は昭和26年10月11日から13日まで、当時の西明寺村佐藤直亮村長を委員長として、西明寺村役場、西明寺農協、西明寺公民館の共催で行われました。調査員は県文化財専門委員の武藤鉄城氏、奈良修介氏、半田市太郎氏、そして県社会教育課の小田嶋邦夫氏で、秋田大学学生、角館高校定時制生徒、西明寺中学校生徒や県内各地の高校、中学校教員など連日100名以上もの参加者を集めて盛大に実施されたことが、『角館時報』の昭和26年10月17日、同月23日、11月11日の3回の記事に速報されています。

昭和26年の7月下旬から8月上旬にかけては、国の文化財保護委員会の手による鹿角市大湯環状列石の発掘調査があり、秋田県内は環状列石調査にわきかえていました。国主催で行われた大々的な発掘は、太平洋戦争後の暗い世相を払拭するに十分な話題性があったようです。当時の日本考古学を代表する大学の考古学研究者達に混じり、武藤氏をはじめとした4人の秋田県側調査員も参加し、中央学界と地元とが総力を挙げた発掘調査でした。その大湯環状列石調査に参加した4人の調査員が県南部での環状列石に類した遺跡を同じ年に発掘したのですから、その盛り上がりもまた尋常ではなかったようです。

角館に住み、4人の調査員のリーダーであった武藤氏は、10月の調査に先立ち6月に2回単独での調査を行い、出土した土器からこの遺跡が大湯環状列石よりも古い時代に作られた組石群であることを確認していました。そして、大湯環状列石の調査で組石の下に見つかった土坑(地面に掘られた穴)が、この袖野遺跡でもあるかどうかに関心を抱いていました。現在では大湯環状列石を含め東北地方北部の組石のある遺跡には同じような土坑があって、縄文時代(当時は石器時代と呼んでいました)の墓地であり、組石は墓穴の墓標のような役割であったことが明らかになっています。しかし、当時はまだその事実が確かめられていなかったのです。大湯で見つかった土坑と同じような穴が組石の下から見つかれば、こうした遺跡は縄文時代の墓地であることを証明できると武藤氏は考えたようです。若い頃から原始時代の社会や人々の死生観などに興味をもち独自に研究を進めていた武藤氏にとって、大湯環状列石よりも古くそして同じような墓地である袖野遺跡の調査は、遺跡調査にわきたつ県内世論にも押されて、まさに自身の考古学研究を結実させるような意味があったかも知れません。

発掘調査は約150坪の範囲に細い鉄棒を突き刺して組石のありかに見当を付け、その位置を明らかにした上で地面の土を掘り、結果、17基の組石を発掘しました。そして、この組石に重なって9つの土坑が発見されたのです。土坑の中には人がすっぽり入るような大型のものや、石器で掘削した跡がはっきり残るものがありました。武藤氏自身による『角館時報』の記事には「予想通り大小深浅各種穴出現」「袖野環状組石発掘報告 穴あつての組石」の見出しが踊っています。武藤氏が翌年10月に発行した『袖野石器時代組石群発掘報告』には、組石群が大湯環状列石の祖型であること、組石に正面位置があるのではないかと、そして大湯と同じく組石の下に穴があることなどが結びの言葉として述べられています。

『角館時報』には、発掘当時、遺跡を訪れた多くの見物人にまで茶や獅子茸茶、栗やお菓子が振る舞われたこと、劇場の前のようにたくさんの自転車が並びそのハンドルを盗んだ泥棒まで現れたほどの賑わいようであったと記されています。武藤氏の考古学にかけた情熱と同じほどに高揚した地元の熱気を伝えています。

秋田県埋蔵文化財センター 資料管理活用班主任専門員(兼)班長 小林 克

お詫びと訂正について 10月号広報「せんぼく探訪 田沢湖のクニマス」の記事で、解説「クニマス及びクニマス標本の学問的意義」の文中で”中新成後期から鮮新成前期”とあるのは、”中新世後期から鮮新世前期”の誤りでした。訂正してお詫び申し上げます。